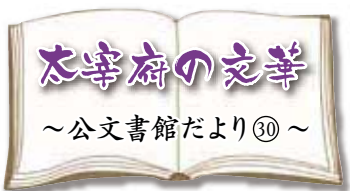


国分村の御茶屋おちやや

江戸時代、国分村と水城村は福岡藩家臣である三奈木黒田家の所領でした。三奈木黒田家の初代は黒田一成かずなりといい、父は摂津国の土豪伊丹氏の一族で加藤重徳しげのりといいました。織田信長と摂津の荒木村重が争った際、荒木側に捕まり獄に入れられた黒田孝高よしたか(如水)を重徳が世話した縁で、その子一成が孝高の子長政と兄弟同様に育てられました。長政の筑前入国後、一成は下座郡三奈木村(現朝倉市)を中心に1万2千石

を与えられ、三奈木黒田氏と呼ばれるようになります。福岡藩家臣のうち、筑前入国時に1万石以上を有していた家臣は、3代藩主光之の代までにそのほとんどが取り潰されたり所領を削減されたりしましたが、三奈木黒田家のみは1万石以上の大身を保って筆頭家老を勤め、宝永6(1709)年には家老よりも一段上格の大老を命じられました。

三奈木黒田家は黒田家の家臣でしたが、自らも多くの家臣(陪臣ばいしん)を抱えており、上級の家臣には自身に与えられた知行地ちぎょうち(大名が家臣に与える土地)の中からこれを再分配していました。三奈木黒田家の家臣の中で、水城村と国分村に知行地を与えられていたのは大庭新左衛門、佐伯十右衛門、半田茂兵衛の3人で



した。また、国分村の大辻には三奈木黒田家の御茶屋(休泊所)があり、奉公人10人が住んでいました。三奈木黒田家臣の加藤正房の日記には、国分村の御茶屋に関する記述が見られ三奈木黒田家の人々がここを訪れていたことが分かります。たとえば、延宝6(1678)年2月25日に3代当主の黒田一貫かずのりが国分村の御茶屋を訪れ鷹狩りたかがなどをして3月2日まで滞在しており、翌年11月21日には一貫の子三太郎(4代当主かずはる)が太宰府天満宮に参詣し、父子で国分村に泊まりました。

延宝9年5月16日に柳川藩主立花鑑虎あきとらの下部接待のため山家村やまゐに向いた際は、藩主や他家の老たちは接待が終わると福岡へ帰りましたが、一貫は国分村に一宿してから福岡に戻り、貞享4(1687)年8月に筑後川の鶴飼い見物に下座まで行った際にも、その帰りに立ち寄っています。また、貞享3年4月2日に休息のため5、6日滞在するつもりで国分村を訪れた一貫は、滞在中の御機嫌伺いは不要である旨を家臣に伝えています。このように、国分村の御茶屋は福岡から近いこともあって、三奈木黒田家の当主や家族が休息のためにしばしば訪れていたのです。